

わが国における「生徒文化」研究再考 ——理論枠組提示のための批判的検討——

白石義郎(久留米大学)

1. 問題設定

「生徒文化」研究は、生徒の社会化過程の分析にとって、また学校の機能分析にとって有効な研究である。

これまでわが国において、いくつかの実証的研究がなされてきた。しかし、「生徒文化」の研究に対して、「生徒文化」の概念の曖昧性をはじめとして、いくつかの問題点が指摘されているが、その最も重要な問題点は、理論化の方向性が示されていないことにあると思われる。今後、生徒文化の研究を一層推進していくためには、理論化の方向性を明示し、確固たる理論枠組を提示することが急務である。そこで、本発表では、これまでわが国で実施された「生徒文化」に関する調査研究を、次の観点について考察を加え、若干の理論枠組の提示をおこなう。

(1) 第一に、「生徒文化」に関する調査研究の根拠を流れる問題意識を考察する。問題意識は、暗黙の前提を含んだり、背後仮説をなしたりしており、調査枠組の設計および調査結果の解釈に決定的な影響を及ぼしている。したがって、問題意識とそれに基づく諸前提を明らかにすることは、理論化の方向性を定めるための重要な作業である。

(2) 第二に、調査の枠組を考察する。

(3) 第三に、分析技法を考察する。

(2)、(3)については、それぞれ理論化への貢献の程度という点から、吟味する。調査・理論への貢献として、モートンは四つの機能をあげているが、「生徒文化」に関する調査研究においては、とりわけ(i)「概念明確化の機能」、(ii)「問題掘り出し」の機能の検討が重

要であり、この点について考察を加える。

また、これらの考察をおこなう際に、英米で実施された“student subculture”に関する調査研究と対比させる。これらの研究は、わが国の生徒文化研究の先行研究をなすものであり、従って調査研究を対比させることは、わが国の「生徒文化」研究の特性を明らかにし、理論化のための投錨点を定めるからである。

2. 考察

(1) 問題意識のレベル

調査研究はいずれも、高校単列化ないし「学校格差」が深化するなかでの「多様な階層・能力・価値志向を伴った生徒層の形成」(米川英樹)、あるいは「分化」(耳塚寛明)に関心の焦点を合わせている。これらの問題関心は、①高校単列化が深化するなかで学校生活を経験したという研究者自身の内的体験、②「遊び論」、「モラトリウム論」等の近時に流行をみた青年論(とりわけその価値意識論)によって触発されたと考えられる。これらの問題関心は、“adolescent society”や“peer group”あるいは“ストリーミングの機能”に関心を合わせて実施された米英における“student subculture”の研究とは異なっており、いわばわが国独自のものである。

問題意識にみられるこれらの特性は、わが国の教育社会学研究にあって、「生徒文化」研究にユニークなと新奇なをもたらした。しかし、同時に「生徒文化」研究が教育社会学の領域において承認され確立された理論によって嚮導を求めたこと、および米英の研

究と実際には不連続であったことは、「生徒文化」研究に記述的・実態調査的性格を強くもたせたのである。

(2) 調査枠組のレベル

個々の調査研究によってかなりの変異はあるものの、「生徒文化」調査の枠組となったのは、①アメリカにおける「student subculture」研究、②わが国の社会心理学的な「青年意識」研究である。これら二種類の調査において開発され使用された枠組および調査項目が、「生徒文化」調査に採用されている。

(i) ①については次のような問題点を指摘する。アメリカ社会でその社会現象を解明するために開発された「概念」および「調査枠組」を、わが国において同種の研究に援用するにあたっては、それぞれの再解釈と再構成をおこなわねばならない。^(いし)これらの作業は十分なされたとは言えない。

(ii) ②は、わが国の生徒文化研究を大きく規定している要因である。ある意味で、高等学校の生徒の「ものの考え方や感じ方」と広義に定義し、「青年層」の意識の一端として分析する方法は、従来の「教育学」的アプローチあるいは「教育問題」的アプローチとはやや距離をおくことにより、「生徒文化」研究に斬新さをもたらせた。しかしながら、②は高校生が学校という制度内的存在であるという視点を弱め、学校の社会的構造あるいは学校内での社会過程との関連性を見うしなうという重要な問題点を残したのである。むしろ、学校教育への関心は、問題意識のレベルでは強固に保持されていた。ただ、現実の調査枠組がこれらの関心を調査のレベルで実現することとをさまたげたのである。^(い)問題意識と調査枠組との乖離は、解釈の恣意性を「生徒文化」研究にしのびませる一つの要因となった。

(3) 分析技法のレベル

分析技法においては、著しい共通性を見出すことができる。それは、①漠然とした、また操作的な「生徒文化」の定義→②理論上の相互関連性があるとはいえない多量の質問項目を多変量解析する→③②にもとづいた類型的考察という手順である。このような分析手法は、英米の研究方法とははなはだ異なった「生徒文化」に対する手法である。

このような多変量解析を使用した手法は、定義自体が曖昧であり、変数間の構造が不明のときに、変数間のある種の構造あるいはパターンを示唆することが可能であるために好んで利用されたといえよう。しかし、このような分類的手法は、耳塚寛明が指摘するように、「生徒文化の分化の諸相を記述する段階にとどまっており、なぜ分化するのか、どのような分化の過程を至十分に説明していない」という欠点をもっているのである。

3. 「生徒文化」研究の理論化のための方向性と枠組の提示

以上のような「生徒文化」研究の問題点を克服し、研究を推進していくためには、理論化の方向性と理論枠組を提示する必要がある。紙幅の関係で詳細は口頭発表に譲るとして、ここではその要点のみを記す。

(1) 方向性

一般的かつ抽象的な「青年意識」研究になく、学校研究としての「生徒文化」研究に焦点を合わせる。したがって、われわれが対象とするのは、学校という社会構造・規範構造に規定された存在としての「生徒」である。

(2) 理論枠組

「生徒」への「役割期待」の構造の分析

① 役割期待の 類型 — 未来志向 ↔ 現在志向

② それぞれの役割期待への同調（ないし逸脱）への圧力源 — 準拠集団

③ 「生徒」の各役割期待への選執行動